母校で2月に講演し、生徒たちと

俳優 川岡 大次郎 さん

役者人生15年、俳優として深みを増す「普通の人を等身大で演じたい」

●かわおか・だいじろう
96年3月大阪工大高卒。97年から映画やテレビドラマ、舞台、CMなどに多数出演。最近の主な出演作は、NHK大河ドラマ『龍馬伝』(高松太郎役)、同連続テレビ小説『カーネーション』(河瀬譲役)など。大阪府出身。34歳。

大阪工大高(現常翔学園高)を卒業してから、映画やドラマ、舞台などで活躍中の川岡大次郎さん。6月にはなんばグランド花月で『吉本百年物語』の舞台にも挑戦し、好評を博しました。がむしゃらに表現者としての在り方を今も模索中。15年の役者人生を振り返り、夢をあきらめないことの大切さなどを語ってくれました。

スリムな長身にさわやかな笑顔。落ち着いた深みのある声もすてきな川岡さん。高校時代は、建築学科進学を目指す真面目な生徒でした。進路希望が変わったのは、3年生の夏。メンズ雑誌に顔写真が掲載されたことをきっかけにメディアとの接点が生まれ、俳優に興味を持つようになったそうです。「もともと映画や漫画などストーリーのあるものが好きで、そういう中に自分も入り込めたら面白いだろうなと。建築への興味も同じですが、ものづくりが好きなんでしょうね。若さ故か、根拠のない自信もありました」。思い立ったが吉日で、オーディションを受けるために履歴書を送り続けたと言います。ある時、それが両親に見つかって、大げんかに。3年間担任だった大谷教諭の助言もあり、いったん専門学校へ進学しますが、テレビ出演が決まるとあっさり中退し、上京したそうです。

ドラマや映画のレギュラー出演のオファーがあり、好調なスタートを切りましたが、胸の内では「どうやったらもっと売れっ子になれるのだろう?どう演じればいい?」と葛藤が続きました。自分なりに役づくりを解釈しても、監督や演出家に求められるものが違えば、変えていかなければならない。「自分って何なんだろうと“答えの出ない旅”をさまよっていました」

それでも続けられたのは、「演じることが好きだから」。2005年公開の映画『サマータイムマシン・ブルース』への出演で転機を迎えます。『踊る大捜査線』シリーズで人気となった本広克行監督の作品で、香川県のロケ地でスタッフ全員、寝食を共にしながら超低予算で作り上げていくSF風の冒険活劇です。「この作品に懸けよう」と意気込んでいた川岡さんに対し、本広監督からのアドバイスは「もっと丸くなってもいいんじゃないか」。その言葉に、とがった演技をしようと意識し過ぎていたことを自覚。同年代の出演者とコミュニケーションしているうちに、「この空気を受け入れて、肩の力を抜いて演じたらいいんだという気持ちになれました」

そして今思うのは、「役者も仕事以外は一般の人と同じように過ごしている。誇張せずに、普通の人を等身大で演じたい」ということ。同時に、「役者なんて世の中に必要ではない職業かもしれない。だけど、文化や芸能は人生を豊かにする、大事なもの」と誇りも感じています。震災の後、チャリティー公演などに尽力する先輩俳優の姿に、社会に与える影響力を実感し、「自分も社会貢献できる俳優になりたい」と奮起。今後は「人間の愚かさや社会の汚れた部分なども表現する深い作品で演じてみたい」と話します。

今年2月、中学時代から友人の常盤教諭が常翔学園高に勤めていることが縁で母校を訪ね、2年生を対象に講演しました。「俳優業は一寸先は闇。常に危機感を抱いています。実際、役者だけで食べていけない時は日雇い労働も経験しましたが、どんな境遇でも人生を楽しめる人が勝つと信じています。一見無謀な夢でも、自分がやりたいという強い気持ちさえあれば何とでもなります。どんな道に進むにしても、情熱と目標を持って走り続けてください」と、後輩たちにエールを送りました。4月には学園90周年の歴史を紹介するDVDの制作でナビゲーターを務めるなど、母校とも新たな形で絆を深めています。

今後、どのような人を演じ、役者としての存在感を高めてくれるのか。さらなる飛躍が楽しみです。